

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(B)（特設分野研究）

研究期間：2016～2022

課題番号：16KT0045

研究課題名（和文）多宗教共存とエスニシティ共生 旧英領カリブ社会における民族紛争抑制のメカニズム

研究課題名（英文）Religious Pluralism and Multiethnic Coexistence: Conflict Suppression in the Anglophone Caribbean

研究代表者

辻 輝之（Tsuji, Teruyuki）

広島大学・人間社会科学研究科（総）・准教授

研究者番号：20546832

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 5,700,000円

研究成果の概要（和文）：集団間の和解と共生を可能にするメカニズムの探求と構築には、多くの社会で暴力的紛争の原因となっている要因を有しながら、比較的高い統合と安定を実現してきた社会を対象として、「なぜ、暴力的紛争が発生しない/しなかったのか」を究明する必要がある。この問題意識から、本研究は、歴史的・社会的構造に類似性を持つトリニダードとガイアナを比較対象とした民族誌調査と史料調査を実施し、英国支配下の植民地政府とキリスト教会の関係、宗教集団間関係が大きく異なり、それが独立以降、前者では、民族集団間の対立が紛争に発展せず、後者では頻発する紛争が社会発展を阻害してきた重要な要因であることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

紛争研究の多くは、現在あるいは過去において暴力的紛争が発生し、社会や国家の存立に甚大な影響を与えた事例に焦点を当て、「なぜ、紛争が発生する/したのか」を究明するのが主流である。本研究は、多くの社会で暴力的紛争の原因となっている構造的要因を有しながら、比較的高い社会統合を実現してきたトリニダードを対象として、「なぜ、暴力的紛争が発生しない/しなかったのか」を明らかにしたことで、集団間の若いと共生を可能にするメカニズムの探求と構築を目指す紛争研究に重要な貢献をした。

研究成果の概要（英文）：The search and construction of mechanisms enabling interethnic reconciliation and compromise require for examining why violent conflict did/does not occur in a society, which shares historical conditions and social structures with many conflict-ridden societies. From this standpoint, this study collected data by ethnographic observations and historical and archival research in Trinidad and Guyana, which have respectively trodden a relatively less destructive path and been stricken by recurring violent ethnic conflicts despite their shared historical and social structures. The study demonstrates that there were significant differences in the church-state relationship and interreligious relations, particularly the major Christian churches and the South Asian Hindu community, during colonial period, and argues that they are the key to understanding of the contrastive, post-independence development in Trinidad and Guyana.

研究分野：紛争研究

キーワード：宗教 エスニシティ 紛争抑制 ディアスポラ カトリック教会 ヒンドゥー教 植民地主義

1. 研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者による博士論文 *Hyphenated Cultures: Ethnicity and Nation in Trinidad* (2006年、フロリダ国際大学) を出発点とする。同論文が対象としたトリニダード・トバゴ(以下、トリニダード)では、奴隷制廃止以後、契約労働制が導入され、南アジア地域から多くの労働者が移住した。身体表象的な特徴だけでは他者化・周縁化できない南アジアからの移民を支配的に包摂する言説として、ヒンドゥー教を中心に非キリスト教的世界観や宗教実践が「人種化」された。一方、トリニダードでは、多くの旧植民地社会と異なり、「人種 宗教」を軸とする集団間の対立が暴力的な社会分裂に発展することはなく、これまで比較的安定した社会が維持、発展してきた。博士論文では、民族誌と歴史分析を相互に補完しながら、特に宗教の多様性と異宗教間の関係に着目して、トリニダードの社会を特徴づけてきた人種・エスニシティによる社会区分と階層、社会統合の関係を考察した。

本研究は、多くの旧植民地社会で暴力的紛争を引き起こしてきた歴史的・社会的構造を有しながら、集団間の緊張と対立が社会統合を脅かす暴力的紛争を引き起こしてこなかった社会を研究対象とした民族誌・歴史研究を通して、紛争研究に貢献することを目指して実施された。紛争研究は、現在あるいは過去において暴力的紛争が発生し、社会や国家の存立に甚大な影響を与えた事例に焦点を当て、「なぜ、紛争が発生する/したのか」を究明するプロジェクトが主流を占める。しかし、集団間の和解と共生を可能にするメカニズムの探求と構築には、他の多くの社会で暴力的紛争を発生させている構造的要因を同じように有しながら、比較的高い社会統合と平和的發展を実現してきた社会を対象として、「なぜ、暴力的紛争が発生しない/しなかったのか」を究明することが必要である (Eriksen 1998)。

この問題意識から、本研究では、トリニダードに加え、ガイアナを比較研究対象とした。トリニダードとガイアナは、現在の社会の歴史的存立過程、その結果として生じた社会構造が非常に似通っている。第1に、英国に割譲されたのが18世紀末から19世紀初頭と遅く、それ以降に砂糖産業の開発が本格化したことによって、奴隷廃止に伴って、中国・南アジア・米国・ポルトガル領マデイラから大量の代替労働力が流入し、突出した多文化・多人種・多宗教社会を形成してきた。第2に、プランテーション開発に伴う「移民労働力の商品化 (commodification of migrant labor)」（Yelvington 1993）がエスニシティの境界と社会的・経済的階層の間に強い結びつきを生み出して文化的差異が人種化された。第3に、英国から独立以後、労働組合や政党が、2大エスニック集団であるアフリカ系と南アジア系国民をそれぞれ組織化したために、エスニシティが対立・紛争の主要軸を形成してきた。ガイアナを含む多くの旧植民地社会で暴力的な民族紛争の原因となってきたこれらの歴史的・構造的要因を有しながら、なぜ、トリニダードでは、民族集団間の緊張や対立が暴力的な紛争に発展せず、比較的安定した社会が形成、維持されてきたのか (Tsuji 2006, 2008)。

参考文献

- Eriksen, Thomas. *Common Denominators: Ethnicity, Nation-building, and Compromise in Mauritius*. Berg Publishers, 1998.
- Tsuji, Teruyuki. *Hyphenated Cultures: Ethnicity and Nation in Trinidad*. PhD Dissertation, Florida International University, 2006.
- Tsuji, Teruyuki. "Villaging the Nation: The Politics of Making Ourselves in Postcolonial Trinidad." *Callaloo: A Journal of African American Arts and Letters*, 31 (4), 2008: 1148-1174.
- Yelvington, Kevin A. *Trinidad Ethnicity*. Macmillan Caribbean, 1993.

2. 研究の目的

本研究は、エスニック集団間の対立を抑制し、暴力的紛争への発展を妨げている「エスニシティの文化 (culture of ethnicity)」（Tsuji 2006）が存在しており、その形成と維持に宗教間の境界を巡る対立・妥協・共存関係が重要な役割を担ってきたという仮説を詳細な民族誌調査と歴史分析を通して検証することを目的とした。

また、本研究は、トリニダードおよびガイアナの事例研究にとどまらず、その比較検討を通して、紛争研究における対立と共生との相互排他的、不可逆単線的な理解を問題視することを目指した。対立のコンテクストをより詳細に記述・分析することによって、対立そのものが共生を構築・維持するメカニズムの不可欠な要因になっている

可能性を探究することを目的とした。この過程で G. Simmel (1955) による紛争研究をはじめ、それを異なる観点から再考した L. Coser (1956) の紛争の社会的機能や M. Gluckman (1955) の「不和の中の平和 (peace in feud)」, M. J. Swartz, et al. (1966) の「紛争抑制の文化的方法 (cultural mode of conflict suppression)」など、紛争に関する古典的概念、理論的枠組みの再検討と再評価を目標とした。

参考文献

- Coser, Lewis. *The Functions of Social Conflict: An Examination of the Concept of Social Conflict and Its Use in Empirical Sociological Research*. The Free Press, 1956.
- Gluckman, Max. "The Peace in the Feud." *Past & Present*, 8 (Nov. 1955): 1-14.
- Simmel, Georg. *Conflict / The Web of Group Affiliations*. The Free Press, 1955.
- Swartz, Marc J., Victor W. Turner, & Arthur Tuden. *Political Anthropology*. Taylor & Francis, 1966.

3. 研究の方法

本研究が依拠する方法論の軸は、聞き取りと参与観察を中心とする民族誌調査と、主に古文書の分析による歴史分析を補完的に実施することによって、宗教間関係とそのエスニシティへの影響について、総合的 (holistic) に考察、論述することを目指した。実施した主な調査は以下の通り。

トリニダード

- 歴史的に異なる宗教・宗派に属する者の交流が盛んに行われてきたマリア信仰の中心地であるカトリック教会のシパリア (Siparia), ラバンティル (Laventille), アルルーカ (Arouca), アリマ (Arima), モンセラート (Montserrat) 各教区における巡礼, 儀式での参与観察, 神父・信者への聞き取り調査, 教区と大司教区の間で交わされた書簡や洗礼記録などの古文書調査を実施した。シパリア教区に安置されているマリア像 *La Divina Pastora* (図 1) については, 19 世紀半ばから今日まで, カトリック教徒とヒンドゥー教徒による分有 (共有) 信仰が行われており, 集中的に調査を行った。
- ヒンドゥー教徒をはじめカトリック教徒以外の者が日常的にざんげや保護を求めて訪れるマウントセントベネディクト修道院 (Mount St. Benedict) における聞き取り調査と参与観察, 附属図書室での史料調査を実施した。
- Interreligious Organization of Trinidad and Tobago (IRO) の年次総会への出席や各宗教団体からの代表に対する聞き取り調査を実施した。IRO は, 1970 年のブラックパワー運動発生を機に, 宗教間の対話促進と政府や政党に対する政策提言を目的として設立された団体である。
- 西インド諸島大学付属図書館 (Alma Jordan Library, The University of the West Indies) West Indiana Collection (図 2: 同図書館広報誌の紹介記事) および国立古文書館 (National Archives of Trinidad and Tobago) における植民地政府文書や新聞, 大司教区古文書館 (Archbishop House Archives) での教区記録等に焦点を当てた古文書調査を実施した。また, West Indiana Collection 内に所蔵されている Eric Williams Memorial Collection (EWMC) を活用し, 同国の初代首相エリック・ウィリアムズの反植民地主義, 国家主義的政策の実施と, その中での各宗教集団, IRO との関係に焦点を当てた文書調査を実施した。



図 1

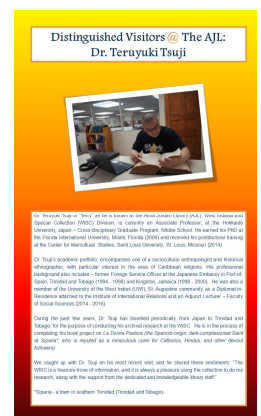


図 2

ガイアナ

- カトリック教会大司教 Fr. Francis Alleyne および司教区所属の神父, 18 世紀末から現在に至るまで, カトリックの布教を中心となって担ってきたイエズス会士および尼僧への聞き取り調査を実施した。
- カトリック教会ガイアナ司教区の機関紙にあたる *Catholic Standard* (<https://rcdiocesegy.org/>) の編集局において,

同国の独立（1966年）前後から民族紛争が最も激化する1980年代初頭までの時期に焦点を絞って同紙記事の検索と収集を行った。

- 国立古文書館（Walter Rodney Archives）（図3）において、契約労働制が導入されていた時期（1838～1917年）の植民地政府文書ならびに新聞記事を中心とした古文書調査を実施した。
- 首都ジョージタウン郊外の複数のヒンドゥー寺院における祭式への参与観察と指導者や信者への聞き取り調査を実施した。

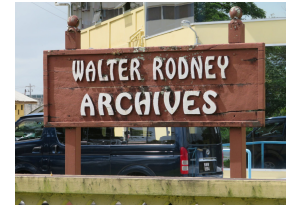


図3

4. 研究成果

調査の結果に基づき、以下の点が明らかとなった。

- トリニダードとガイアナは、ともに19世紀初頭に英国に割譲された（それぞれ1802年、1814年）が、その時点でのキリスト教会と植民地政府との関係に大きな違いがある。英国の勢力拡大に対して、1873年、スペインは人口の少なかったトリニダードに、出身・国籍に関係なく、カトリック教徒であれば入植を許可する新たな政策を実施し、英国に支配された時、同島人口の80%以上がフランス系移民、90%がカトリック教徒であった。割譲後、英国国教会の勢力拡大と、それに支えられた改革を進めようとする植民地政府とカトリック教会の対立は、1962年の独立まで続いた。一方、ガイアナでは、割譲以降、急速な英国国教会化（Anglicization）が進み、政治と宗教がともに支え合う覇権の支配によって、労働者階級の徹底した搾取が行われ、その結果、人種・エスニシティを境界とする集団間紛争が恒常的に発生した。
- 両国を独立へ導いた政治指導者、トリニダードのエリック・ウィリアムズとガイアナのフォーブズ・バーナムは、ともに反植民主義、反帝国主義を軸とする政策を進め、その一環として、徹底した政教分離と、教会が社会に対して持つ影響力の縮小を目指した。両国ともに宗教の人種化と、それに基づくエスニック集団間の対立は、独立後の政党政治によって先鋭化した。トリニダードで植民地政府、英国国教会との対立の中で影響力を維持せざるを得なかったカトリック教会は、教育や婚姻など重要な社会制度に関する対立と交渉の中で、少数キリスト教派、ヒンドゥー教コミュニティとの妥協を強いられてきた。この点を見誤ったウィリアムズの政策は、カトリック教会だけではなく、他の従属的宗教集団からも抵抗を受け、修正を繰り返す結果となった。一方、バーナムによる宗教の勢力縮小は「成功」したが、エスニック集団間の対立を煽ることで支持基盤を維持する独裁体制をもたらした。
- キリスト教会が植民地支配と労働者搾取に寄与した点は否定できない。しかし、英国割譲後、トリニダードではカトリック教会およびガイアナの英国国教会とヒンドゥー教徒との関係についてのより詳細な分析と記述は、両国における独立以降のエスニック集団間の対立を正しく理解するうえで不可欠である。また、ともに「独立の父」として、絶大な影響力を持っていたウィリアムズとバーナムが自国の歴史と植民地期の集団間関係、その中での宗教の影響についてどのように理解していたか、史料からさらに詳細に記述する必要がある。
- トリニダードでは、カトリック教会の不安定な支配から生じた宗教間の相互依存関係が単に指導層の政治的妥協にとどまらず、信者間にも形成・維持されてきた。一つの例が、宗教を超えて共有される母性に対する信仰と帰依がマリア像を介した異宗教間の交流と混交をもたらし、指導層の対立によって分断されえないほど強い相互依存を成してきた。シパリア教区のLa Divina Pastora像に対するヒンドゥー教徒の信仰は、20世紀初頭、カトリック大司教区から迫害の対象となったが、ヒンドゥー教徒の帰依と寄付がなければ、カトリック教徒の信仰も成り立たないほどの関係を築いてきたことから、シパリア教区民からの強い反対を受けて継続することとなった。

- 現在、本研究の結果に基いた以下の単著論文を執筆中であり、2023 年度中に寄稿する（題名は仮題、投稿雑誌は予定）
 - “Anatomy of Conflicts: Functions of Religious Conflict in Anglophone Caribbean.” *Caribbean Studies*.
本論は、宗教がエスニック集団間の紛争に与える影響について、主にジンメル『紛争論』に依拠しながら、トリニダードとガイアナの事例研究を比較分析することを目的とする。
 - “The Place and Relevance of Religion in Eric Williams’s Nationalist Vision: An Ethnography of Reading.” *The Journal of Imperial and Commonwealth History*.
本論は、EWMC 所蔵文書の分析を中心に、エリック・ウィリアムズの政治理念、政策における宗教の位置づけと実際の政治発展への影響について考察することを目的とする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Teruyuki Tsuji	4. 巻 94
2. 論文標題 The Power of the Illegitimate: La Divina Pastora and the "Coolie Mission" in Colonial Trinidad	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 New West Indian Guide / Nieuwe West-Indische Gids	6. 最初と最後の頁 211 ~ 244
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1163/22134360-bja10006	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Teruyuki Tsuji	4. 巻 79
2. 論文標題 Alexander Rocklin, The Regulation of Religion and the Making of Hinduism in Colonial Trinidad (Book Review)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Asian Ethnology	6. 最初と最後の頁 204 ~ 206
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Teruyuki Tsuji	4. 巻 2
2. 論文標題 The Madonna's Dress: Raciality, Sexuality, and the Spirit of the Virgin Mary and/or "Indian Lady"	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Maria: A Journal of Marian Studies	6. 最初と最後の頁 不明
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Teruyuki Tsuji	4. 巻 不明
2. 論文標題 George Gmelch & Sharon Gmelch, In the Field: Life and Work in Cultural Anthropology (Book Review)	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 History of Anthropology Review	6. 最初と最後の頁 不明
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Teruyuki Tsuji
2. 発表標題 The Politics of the Illegitimate: Dress, Sexuality, and Spirituality of the Madonna
3. 学会等名 Catholic Theology in the Caribbean Today (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Teruyuki Tsuji
2. 発表標題 The Power of Mary: Inspiration and Seduction for the Colonial Construction of Religions
3. 学会等名 American Anthropological Association (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Teruyuki Tsuji
2. 発表標題 The Power of Mary in the "Coolie Mission": Inspiration and Seduction for the Colonial Construction of Religion
3. 学会等名 Theology in the Caribbean Today (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Teruyuki Tsuji
2. 発表標題 The Madonna's Dress: Race, Sexuality, and the Spirit of the Virgin Mary and/or "Indian Lady" in Trinidad
3. 学会等名 Universal than Catholicism: Mary Among Asian Religions (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Teruyuki Tsuji
2. 発表標題 Moved by Mary: Engendering Religious History in Trinidad
3. 学会等名 Institute of International Relations Seminar, The University of the West Indies, St. Augustine (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 国際開発学会 (編)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 丸善書店	5. 総ページ数 640
3. 書名 国際開発学事典	

1. 著者名 Anthony D. Smith, John Stone, Rutledge M. Dennis, Polly S. Rizova, & Xiaoshuo Hou	4. 発行年 2016年
2. 出版社 John Wiley & Sons	5. 総ページ数 2520
3. 書名 The Wiley Blackwell Encyclopedia of Race, Ethnicity, and Nationalism	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------